慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古今集仮名序の注釈と改訂について(一) : 荷田春満『古今和歌集序説』
Sub Title	A study of the note and revision of Kokinshu-kanajo (1) Kadano Azumamaro's Kokinwakashu-josetsu
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2008
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.43 (2008.) ,p.115- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古今集仮名序の注釈と改訂について（一）

―荷田春満『古今和歌集序説』―

川上新一郎

はじめに

本稿執筆のきっかけは、本誌前輯に「明治大正期古今集注釈書・研究書略解」（平20・2）を発表した際、明治期の注釈書において、古今集の本文、就中仮名序がしばしば大幅な改訂（というよりむしろ改竄）を受けていることに気づいたことによる。それらの改訂は近世国学者の見解に影響を受け、しばしばそれを踏襲したものである。この点については前稿の末尾の「おわりに」において既に指摘したところである。実は稿者はこれらについて無知であって、執筆中に初めて気づいて一驚したにすぎない。

そこで、近世国学者の古今集仮名序の改訂について、比較的知られている真淵や景樹以外にも目を向けて明治期への影響を主眼に考えてみたいと思うに至ったのである。事実、この分野の資料については、十分に発掘、整理されていない憾みがある。しかしながら、着手して直ちに、稿者の国学に対する知識が不足しており、到底そのようなことは不可能であることに気づいた。結局、古今集仮名序の本文改訂に関して、いくつかの資料紹介をするに止めることとした。はなはだ不満足な内容であるが、先学の研究の乏しい分野ゆえ、なにがしかの意味もあろうかと考えあえて公表する次第である。

そもそも現在の古今集研究は、過去の研究に対してはなはだ

冷淡であったと言わざるを得ない。利用できるものだけを取り上げ、他は無視する傾向が強かったようである。中世の古今集注釈書がほとんど無視されていたのは、それ程過去のことではない。その点は現在では大幅に改善されてきているが、その一方、近世国学者の研究は、戦前の段階から、さほどの進歩が見られない。戦後、過去の反動からか、国学研究者は数少なく、また、研究が行われても、国文学研究の立場とは異なる場合もある。みずからのことを棚上げして言えば、この状況は改善されるべきと考える。国学について無知を恥じる稿者が本稿のようなものを執筆する意図はそこにある。とりあえずの資料紹介と考えていただきたい。

第一章　荷田春満『古今和歌集序説』

一

荷田春満の古今集研究、特に仮名序本文の改訂については、賀茂真淵『続万葉論』、香川景樹『古今和歌集正義』から日本歌学全書の佐佐木信綱の注に至るまで、諸書にその名が見えるが、肝心の春満の注そのものが明らかにされておらず、いかなるものにもとづくのか、あるいは単なる孫引きなのか、判然としなかった。このため、従来、後述の諸家の研究はあるものの、春満の注を容易に利用することは出来なかった。

ところが、近年、國學院大學によって新たに春満の全集が編纂されることになり、すでに刊行が始っている。また、それと並行して、國學院大學の根岸茂夫氏を中心に荷田春満の著作や資料を総合的に調査する共同研究プロジェクトが立ち上げられた。その成果は『近世国学の展開と荷田春満の史料的研究』（平成15～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書、平成18年3月、以下これを『根岸科研報告書』と称することとする）及び『荷田春満年譜稿　寛文十一年羽倉信詮日記』（平成19年度國學院大學特別推進研究「近世における前期国学の総合的研究」成果報告書、平成20年3月、以下これを『根岸國學院報告書』と称することとする）として公表されている。

これを見ると、今後春満の研究は飛躍的に進展することが期待され、すでに新たな全集刊行のほか、「國學院雑誌」平成十八年十一月号の国学特集にもその成果の一端が現れている。

古今集研究については近時刊行された『新編荷田春満全集』

第六巻（鈴木淳氏解題、平18刊）に古今集関係の著作が主として東丸神社所蔵本によってまとめて活字化され、これによって、春満の古今集研究がどのようなものであるかが、初めて明らかになった。

こうした状況を考えると、本稿は些細な資料紹介であり、いずれ総合的研究の一部として行われるべきものかもしれないが、もともと「はじめに」に書いた関心に発したものであり、その点の意義もあろうかと考え、公表するものである。

さて、春満の古今集研究については、早く『荷田春満』（昭15初刊）の大著があり、後年『荷田春満の古典学』（全二巻、私家版、昭55、59刊、第一巻は前著の覆刻）に集大成された三宅清氏の業績がある。そこで三宅氏は春満の仮名序に関する著作二点を発掘紹介されている。その論はいずれも『荷田春満の古典学』第二巻に収められている。左記の二編である（本稿では以下この第二巻を『古典学』と称することとする）。

「古今集序釈」（77オ―85ウ）[1]（初出『国学の学的体系』昭18刊）

「古今集の序解―春満より真淵へ」（293ウ―305オ）（初出「國語・國文」昭19・3）

前者は無窮会神習文庫蔵本（函架番号九八九四）の紹介で、後に内村和至氏「『古今集序釈』解題・翻刻」（「明治大学人文科学研究所紀要」49平13・3）に解題翻刻がなされた。新編全集にもこの本が収められている。[2]

一方、後者紹介の本は、三宅氏によれば甲府市の南塘文庫蔵本で、空襲戦災で焼失したという。

さらに、新編全集では東丸神社蔵本の『古今集序註』が解題翻刻されている。解題に指摘はないが、この本は前半のみの零本である。

また、新編全集の解題中で静岡県某氏所蔵『古今和歌集序説』が紹介され、「春塘文庫旧蔵『古今集序解』と同種のものと目される」（469頁）とある。

さて、手許に「古今和歌集序説」と題する一本がある。この本は内題の一致などから、あるいは静岡県某氏蔵本と同じものかと思われる。

以上、春満の仮名序注と考えられるものが六本存在することになる。まだ出現するであろうが、江戸後期から春満の仮名序注はかなり知られていた（但し、『春葉集』所載仮名序を春満説と称した例もある）ことを考えると、不思議なほど少ない。

後述するように、これらはいずれも春満が自ら筆を執ったものではなく、後人の編集にかかり、おそらくは弟子が講義を筆記編集したものと思われ、本より自筆ではない。子細は後述するが、これらを分類すると左記のようになると考えられる。

1、古今和歌集序釈
　無窮会神習文庫蔵本
　＊片桐洋一氏蔵本はこれに同じか
2a、古今集序註（存前半）
　東丸神社蔵本
b、古今集序解
　春塘文庫旧蔵本
c、古今和歌集序説
　家蔵本
　＊静岡県某氏蔵本はこれに同じか

1は2の諸注に比べるとやや簡略である。鈴木淳氏は新編全集解題において、1『古今和歌集序釈』と2a『古今集序註』とを比較され、「両者の成立時期の先後を論ずるためには、さらに詳しい考察が必要であるが、あえていうなら、上記の点（稿者注、序釈より序註の方が詳細で踏み込んだ解釈をしていること）等を勘案して、『古今和歌集序釈』の方がやや先んずるように思われる。」（481頁）とされる。次に2のa、b、cは異本関係にあり、かなりの異同があるが、同文の箇所が多く、基本的に同種の注と考えられる。

ここで家蔵本を紹介し、古今集序註、古今集序解と比較することとする。といっても、家蔵本は紹介することが躊躇されるほどの粗本である。ただ、この注の伝本は少ないので、とりあえず概略を知る一助にはなろうかと考える。

二

まず、書誌的事項を記述する。

家蔵本
古今和歌集序説　二巻
　慶応三年（一八六七）正弘写　　一冊

袋綴（包背装）。淡茶色表紙（二五・五×一七・五糎）、左肩灰と青の雲形文様題簽「古今和歌集序説」。料紙、楮紙。墨付、五二丁。遊紙、前一丁、後なし。字面高さ、約二二・七糎、注約一字下げ。毎半葉十四行書。内題、「古今和歌集序説」「古今

和歌集序説下」。また、上巻内題の次行に「荷田春満先生撰定
東都祠官　木成従著
浜松処士　加茂真淵校」とあり、朱で「春満」の右に「アツマ丶ル」、左に「京稲荷祠官」と注し、さらに、「木成従」の右に同じく朱で「神田明神丶主」とある。上巻部分には朱の句点・返点と墨の濁点が付されている。これらの朱は後人別筆の疑いもあるが、にわかに判断できない。

奥書

此書者宮ケ崎町深江氏書也

安永七年戊五月廿八日写成

志貴泰政

慶応三年丁卯十月写　　正弘（花押）

奥書中に見える人名はいずれも不詳である。

印記、巻頭「三浦良平／蔵書之印」（重郭長方朱印）。

誤写はさほど多くないが、読みにくい悪筆で、底本に虫損などによる本文の欠損があったと覚しく、「ムシ」と書いた箇所もあり、特に下巻部分に欠字箇所が多い。

本書は古今集仮名序の注釈で、上下二巻に分かれ、「今の世の中いろにつき人のこゝろ花に成けるより」以下を下とする。

三

さて、本書の内題及びその次行の記述を見るに、新編全集解題で紹介された『古今和歌集序説』との関連が想定される。鈴木淳氏の解題には次のようにある。

なお、この春塘文庫旧蔵『古今集序解』と同種のものと目されるのが、國學院大學日本文化研究所の松本久史氏ご教示の静岡県某氏所蔵『古今和歌集序説』である。本文端作りに、「古今和歌集序説　荷田春満先生選定／東都祠官木成従著　浜松処士加茂真淵校」とあるが、奥書等はない。「木成従」の「木」は木村の修姓と考えれば、「木村なり由」と同一人物か。[3] おそらく講義の聞書きを元にして成したもので、『古今和歌集序釈』などと同様の性格を持つ書と考えられる。内容は、『古今集序註』と大同小異であるが、真淵の関与があるだけに多少、注意して扱うべき資料である。（469頁）

この鈴木氏の記述によると、静岡県某氏所蔵『古今和歌集序説』は本書と似通っており、両者が同一の注釈ではないかとの推測を生じさせるものがある。また、鈴木氏は『古今和歌集序

説』を「春塘文庫旧蔵『古今集序解』と同種のものと目される」「内容は、『古今集序註』と大同小異である」とされているので、結局、『古今集序解』『古今集序註』『古今和歌集序説』の三者は同種のものということになる。

このうち『古今集序解』は三宅氏の紹介による他ないが、その紹介はかなり詳細であるので、概略を知ることが可能であり、『古今集序註』は新編全集に翻刻されているので、家蔵の『古今和歌集序説』を用いれば、三者を比較することが出来る。以下はその結果である。

まず、新編全集の『古今集序註』と本書を比較してみる。同種の注であることは確かであるが、相当の異同がある。なお、『古今集序註』は巻上のみであるので、比較はその部分に限られる。比較の便を考え、新編全集の本文頁数で示し、本書を対照する形とする。(4)

1

冒頭「やまと歌は、人のこゝろをたねとして、よろつのことの葉とそなれりける」の注文は全く別文で、本書は「やまとうたは、人のこゝろをたねとして、万のことの葉とぞなれりける」「人のこゝろをたねとして」と、変則的に二段に分けている。最初の部分を並記してみる。

序註（19頁）

やまと歌は、人のこゝろをたねとして、よろつのことの葉とそなれりける

やまと歌とは、詩をからうたと云に対していへる也、大和歌とかけるによりて、大にやらく(ママ)歌といふ説をなすは、文字によりての事にしてうけ用るにたらす、日本とかき倭とかきても、皆やまと、訓する古風なれは、大和の文字にかゝはる事にはあらさるなり、然るをやまとの国号を釈するに至りては、あめつちひらけて後も泥土未乾かされは、人々山に居程〳〵往来もしけれはそのあとの見えつる故に、山あとの国と名つけしと云るは、古義をしらさる僻説なり、そのゆへは、むかし神武天皇の皇居は、そのはしめ日向国宮崎と云所に有しを、東を征給ひて後、今の大和国に都をひらき大宮を建給ひ皇居を定め給へるより、その地の名をもて本邦一州の名とさため給ひしこと也、（中略）人のこゝろをといふを貫之の本にはひとつこゝろをとあるよし、或書にみえたり、尤しかるへき

也、人の心をたねとしてといひては、よろつのことの葉となれるといふにもかなはさる也（すそれより下の詞にも合さる也）ひとといふより万とむかへいへる詞なり、今案、貫之集にひとつ心とありとはみえたれとも、よろつのことの葉と云につかはねはひとつのこゝろをとありつらん歟、尤ひとつこゝろといへるも古詞とはみえて、此集中、忠岑か長歌の詞にも見えたり、しかれともそれは歌詞也、是は文章なり、事により所によるへき事也、ことの葉といへるはすなはち歌也

序説

やまとうたは、人のこゝろをたねとして、万のことの葉とぞなれりける

やまと哥とは、から歌に対していへり、やまとは我国の惣号也、冷泉家の説、、やまとうたといへるに、二義有、一義は、俊頼朝臣は、和国の哥謡なる故に、此国のうたといはむ為也、基俊の一義はしからず、やまとうたとは、大にやはらく哥と心得べき也といへり、二条家其外、諸家の説是に同じ、然れども、俊頼朝臣の説かなへり、基俊の説は、かなはず、いかにとなれば、大和の二字は、上古の事にはあらず、後世国郡村里の号、二字に定られたるより後の事なり、古は倭の一字を書て、やまとゝ訓じ又日本の二字を用ゐて、やまとゝ訓じ、或は、大養徳の三字を、やまとゝ用ゐられて、必大和の文字にかきらざる事なれば也、又、古今和哥集伝授の説に、大和は、山跡の義にて、号すといへり、飛鳥井家の説も、是に同じ、然れども、山跡の義は、元日本紀私記の説也、正義にはあらず、惣て国号は、神書の伝説なれば略之

人のこゝろをたねとして

伝授の説、其外諸家の説ともに、人の心と云り、然れども、人の心をたねとしてと云事、理りなし、是はひとつの心をと、貫之は書るなるべし、さるによりてこそ、万の言の葉とぞなれりけると書て、句儀首尾する物也、真字序にも、託二其根於心地一発二其美於詞林一と書り、□□（欠字）と云を以て、人のこゝろにあらざる事しるべし、□□（欠字、顕昭カ）の古今註にも、人の心を種とすると云下に、貫之の本には、一ツ心をたねとすると書るといへり、されども顕昭、人の心と、一ツ心との、是悲（ママ）を不弁して、さしおきたる事、いかに心得られたるにか有らむ、人のこゝろを種として、万のことの葉となる理り、下の詞にもかけあはず、一の

こゝろをたねとして、万のことの葉とそなれりけるといひて社、理りも明らか成べし、顕昭注本に、つらゆき本には、ひとつ心をたねとしてと書り、しかれども、是は一の心と文字に書たるを、ひとつこゝろと、かなに書たかへたるか、又はひとの心と、かなにかきたるを、人といふ字に、後世書たかへてより、あやまりを伝へたるかなるべし、ひとつ心といふも、古詞とは見えず、此集中、忠岑か、長歌の詞にも見えたり、されどもそれは哥詞也、これは文章也、ことにより所によるべき事なれば、万のことのはといふに対しては、ひとつの心をたねとしてといふべし、もとは、一の心をと書るを、ひとのとも、ひとつのとも、よまるれば、後の人かきたかへたるより、儀をも心得たかへしなるべし

以上、序説は省略せず引用したが、両者の違いがよく分かるよう、あえてそのようにした。

これだけを見ると、両者は全く別注であるかのごとくであるが、序註の末尾近く「尤ひとつこゝろといへるも古詞とはみえて、此集中、忠岑か長歌の詞にも見えたり、しかれともそれは歌詞也、是は文章なり、事により所によるへき事也、」は序説の「ひとつ心といふも、古詞とは見えず、此集中、忠岑か、長歌の詞にも見えたり、されどもそれは哥詞也、これは文章也、ことにより所によるべき事なれば、万のことのはといふに対しては、ひとつの心をたねとしてといふべし、」に類似しており、無関係ではない。

さらに次の「世中にある人、ことわさしけきものは、見るもの(心に思ふことを)きく物につけていひいたせるなり」の注を見ると、以下のごとくである。

序註（20頁）

世中にある人、ことわさしけきものは、見るもの(心に思ふことを)きく物につけていひいたせるなり

ことわさは事業のこゝろ也、見る物きく物といふにかけて見るへし、そのしけきことわさの見るものきく物につけて心に思ふことを(ママ)をいひ出る也

序説

世の中にある人、ことわざしげき物なれば心におもふ事を――云出せる也

ことわざは、事業のこゝろ也、みる物きく物といふにかけて見るべし、そのしけきことわさの、みる物きく物につけて、心におもふ事をいひ出る也

これを見るに、同文である。以下見ていくと多くの箇所が、酷似あるいは類似しており、大きく異なる場合の方が少ない。しかし、異なる箇所は全くの別文の場合が多く、かなりの異本関係にあることも明らかである。従って、序註が存する上巻部分に限って、大きく異なる場合校異を示すこととする。

2

序註（21頁）

（「ちからをもいれすして」以下の注）

是は歌の徳をあけていへる也、ちからをもいれすして天地をうこかすとは、ふるひうこかすを云にはあらす、高大無辺の天地なれは、歌の徳によりては天地も感動することをいへるなり、うこかすといはんとて、ちからをもいれすしてとこと葉にあやをなす也、後のことなれと、能因法師か、天川なはしろ水にせきくたせ天降ります神ならは神、とよめるに、雨のくたりしなと云は、これ天地をうこかすといふ理りなり、めにみえぬ鬼神をもあはれとおもはせとは、鬼神はおにと神との二つ也、鬼は邪の方をいひ、神は正しきを云、鬼神の字義をもていはんことは、此国のおに神といはんには全くあたるへからさる歟、めにみゆるものにこそあはれともおおもはせ（ママ、稿者）んことは常のことなるに、歌のとくには、めにみえぬおに神をもあはれとおもはすると也、右の両句は、毛詩に動天地感鬼神莫遇於詩（ママ、稿者）と云を本拠としてかけるなり、むかし鬼ありて人をそこなふことありしに、火も木も我大君の国なれはいつくかおにのすみかなるへき、とよみたるに、そのことやみけるなといふことをもてかけるやうにいへるは、ひかことの限り也、（以下ほぼ同文）

序説

ちからをもいれずして――なぐさむるは哥なり

これは、哥のとくをあげていへる也、ちからをもいれずして、天地をうこかすとは、哥のとくによりて、天地も感動するなり、うこかすといふによりて、力をもいれずといひ、鬼神をも、あはれとおもはせといふによりて、めに見えぬとかける、まことに和文の筆術也、めにみえ

ぬ、おに神をも、あはれとおもはせとは、鬼神の論まち〳〵なれど、畢竟、陰霊を鬼といひ、陽霊を神といふと心得べし、右の両句は、毛詩に、動二天地一感二鬼神一莫レ遇二近文選於詩一といふ類也、あはれとは、嘆美嘆慨を、かぬる語也、（以下ほぼ同文）

注文の量は序註の方が長いが、序説には独自の内容もあり、簡略と言ってすまされないところがある。

3

序註（27頁）

（「すさのをのみことは、あまてるおほん神のこのかみなり、」以下の注）

（前略）いつもの国にみやつくりしたまふときに、その所にやいろ雲の立をみてよみたまへる也、須賀也茲大神初作須賀宮之時自其地、雲立騰尓作御歌其歌臼（ママ、稿者）夜久多都伊豆毛夜弊賀岐都麻基微尓（ママ、稿者）夜弊賀岐袁、是をもてかけるとみえたり、（以下ほぼ同文）

序説

（「すさのをのみことは、あまてるおほんかみの、この神なり、」以下の注）

（前略）いづものくに、、みやづくりし給ふ――よみ給へるなりとは、古事記云、速須佐之男命、宮可レ造作之地求二出雲国一到二坐須賀此二字以音下効之地一而詔（シテ）云吾来二此地一我心須賀云〻斯而其地作宮坐故者於今云二須賀一也茲大神初作二須賀宮一之時自二其地一雲立騰尓作一御歌一其哥曰

夜久毛多都――

是をもてかけると見えたり、（以下ほぼ同文）

この部分の異同は、序説が『古事記』によって正したのであろうか。また、序註注文末尾「古事記、日本紀ノ相違かくのことし」は序説にはない。

4

序註（29頁）

なには津の歌は、みかとのおほんはしめなり

（前略）みかとの御はしめとは、帝王の最神（ママ、稿者）といふことにこそ聞也侍れ、これ疑しきの一つ也、天皇の皇子男女二十五（ママ、稿者）男九年（ママ、稿者）女十一年（ママ、稿者）之内也、（以下ほぼ同文）

序説

なにはづの哥はみかどのおほむはじめなり

（前略）みかどの御始とは、帝王の最初と云ことにこそ、聞え侍れ、是疑しき一ツなり

おほさゞきのみかと、なにはにて、みこと聞えける時、東宮を、たかひに――この花は、梅の花をいふなるべし

大さゞきの尊は、応神天皇、第四の皇子なり、兎道稚郎子と申も、異母の皇子にて、弟とにてまします、応神天皇の皇子、男女二十王、男九王女十一王の内なり、（以下ほぼ同文）

序説は「おほさゞきのみかと、」以下を一段とするほか、「大さゞきの尊は、応神天皇第四の皇子なり、兎道稚郎子と申も、異母の皇子にて、弟とにてまします、」の文が加わっている。

5

4の注文の続きで、序説は序註（31頁三行目）「梅の題は別に出たるにてもしるへし」の次に左記の一段がある。

又此うた、六帖にも、王仁か哥たる事なし、其外いづれの古書にも、作者をしるさず、王仁か哥にて、大さゝきの尊をそへて、其徳たしか成ことにしあらば、そののち、和尓□（欠字）子孫の申文にも、のすべきことなるを、かつてしかるされは、決て、王仁か哥ならざるべし、また王仁を、王仁と書によりて、今音によめれど、古事記、応神天皇段に、百済国中署貢二上人一名和迩吉師即論語十巻千字文一巻是人即貢進此和尓吉師者文首等祖是、わにと、読べき也、日本紀王仁とかけるも、わにのかな也

6

序註（31頁）

（「かつらきの大きみをみちのおくへつかはしたりける時に、」以下の注）

（前略）葛城王は橘諸兄也、（以下ほぼ同文）

序説

（「かつらきの大きみを、みちのくにへつかはしける時、――これにそ、おほきみの心とけける」以下の注）

（前略）此かづらきの王を、橘の諸兄と、諸抄にいへるは、誤なるべし、天武紀秋七月、葛城の王卒といへり、此人なるべし、（以下ほぼ同文）

右の5及び6を見ると、序註を序説が増補している。但し、序註や序説が春満の講義を元にして編集されたものであることを考えると、増補が春満の意図を反映しているか否かは明らかでない。さらに、増補の説はいずれも既に契沖の『古今余材抄』に見えており、後者は真淵の『続萬葉論』にも引かれているにおいては尚更である。

7

序註（32頁）

このふた歌は、うたのちゝはゝのやうにてそ、手ならふ人のはしめにもしけり

此両首より以前、歌はおほくあれとも、此歌はその徳あらはれて世人もよくしりたるゆへになるへし、父母のやうにてそといへるは、難波津の歌は王仁か作、浅香山の歌は采女か詠、是男女の歌なるを以てかくいひ、また其徳のあらはれたる歌の第一のやうにいひつたへ、人のおやの上にみへる如くなるをもてもかくいふなるへし、

（以下ほぼ同文）

序説

このふたうたは、哥の父母のやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける

此両首より以前、哥はおほくあれども、このうき（タ）は其徳あらはれて、世人よくしりたる故になるべし、父母のやうにてぞとは、或抄に父母と定れる義、なきによりて、やうにてぞと、書るといふは、しかるべし、帝王の徳をいひ、大きみの心をやはらけ、男女のうたと聞ゆれば、父母のやうにてとは、いへるなるべし、（以下ほぼ同文）

序説に言う或抄の説とは両度聞書をさすと思われる。両度聞書には「此哥を父母といふ事定れる儀なき故にやうにてと書るなり」（寛永十五年版本、振仮名省略）とある。

8

序註（33―34頁）

（「その六くさのひとつにはそへうた」以下の注）

そへ歌とはよそふると云にはあらす、此歌のことく、面は全く梅のことをよみて、裏には仁徳天皇の即位し給へるをそへたる也、是はから歌の風のすかたと同義なり、詩序云、上以風化下下以風刺上云云、注云、風化風刺皆

謂破言喩所付言云云、此風は諷の字同意なり、日本紀にも諷歌をそへうたと訓す、或説に、そへ歌とは、風の物にあたりてそれとしらるゝことく、物にそへて心を見すると釈するはかなはさる事也、則是大和歌を大にやはらくと釈せし類ひにて、風をかせとのみ心得たる人の誤也、（以下ほぼ同文）

序説

（「その、むくさのひとつには、そへうた」以下の注）

そへうたとは、たとへば、はなのことのみを、あらはして、裏におもふことを、よせいひて、さとらしむるなり、難波津の詠も、そのさまなり、日本紀第三、神武紀に、諷哥ヵ例語をもて、わざはひをはらふことは、此時よりはじまれりと云ゝ、如此なれば、其哥の名目によつて、来ること久し、祇註に、そへ哥は、面にあらはさずして、風の物にふれて、見ゆるごとし、物によそへて、心をみする也といへり、此説かなへるに似て非也、六義をいふ時の、風は、かぜといふことわりなし、そふるとは、よするといふと、同じ古語也、万葉集に、何に寄と有哥皆是なり、（以下ほぼ同文）

この祇註も両度聞書に「そへ哥はおもてにあらはれす風の物にふれて見ゆることく物によそへて心を見するなり」とある。

9

序註（34頁）

（「ふたつにはかそへうた」以下の注）

かそへ歌とは、ものをかす〳〵ならへあけていふは、かそふるかことしなれは也、（以下ほぼ同文）

序説

ふたつにはかぞへうた

かず〳〵のものを、よみあらはして、心をのぶればかぞへうたといへる也、されば引用る所

さく花に、おもひつくみの、あぢきなき、身にいたづきのいるもしらずて（以下ほぼ同文）

10

序註（35頁）

（「これは物にもなすらへて」以下の注）

此古註のこゝろも、比の字義を以ていふ故に、かなへり

ともみえすて、たらちねの歌を出せり、是は妹にあはぬかかふこのまゆこもりのやうになんあるとなすらへたる姿なり、しかるを又物にもなすらへてといへるは、いかに心得たるにや

序説

（「これはものにもなずらへて――」以下の注）

此者、引物連レ類、此字義に、よれる註と見ゆ、されば霜などにもなずらへ、さしてそ、やうにこそあれと、いふ義なり比類する意なれば、ものと、我と、二ツことをたてゝ、混雑せずして、比類をとりて、差別有やうにいへる也、君にけさの哥は、辞混雑せり、古註に引、たらちねのうたは、かふこのまゆこもりの、憂鬱を、わか妹にあはぬ思ひに、比類してよめる也、さればまゆこもりといひ、妹にあはずてといふ詞も、の（如本）と我（人か）とにして、両言と□（欠字）に、彼にも用ゐかたく、我にもかかりかたし、二ツ物をならべて、しかもまじはらざる所分明也

万葉第十二、たらちねの、はゝがかふこのまゆこもりいぶせくも有か、いもにあはずて、此哥を拾遺集恋四に、人丸の哥としていれたり、扨古註にたらちめの、おやといへるは非也、万葉集に、垂乳根と書て、母の冠辞とせる事、あまた見えたり、又垂乳為とも有、はゝにかきる冠辞なれば、ちゝとも、親とも、つゞけたる例、万葉に見えず、但僧正遍昭の、たらちねは、かゝりとてしもとよめる、たらちねの母と、つゞけたる事のはしめ也、是より後、母の詞を□（欠字）して、たらちねといひて、母の事に用ひ来たれり

この辺りより両者の異同が大きい場合が多くなる。

11

序註（36頁）

よつにはたとへうた、我恋はよむともつきし

此歌、君か代はと有本有、尤可然歟、されとも八百か行はまのまさこと我恋といれ（ママ）かまさるおきつしま守、といふ歌あるときは、恋をよむといはんむねありての事にや、代は一かそふれとも恋をかそふる理りなければいかゝと思へとも、八百か行の歌あるときは両義ともに棄

序説

よつにはたとへうた

わか恋はよむともつきじ荒磯海の浜のまさごはよみつくすとも、一本我恋はといふを、君か代とせり、これしかるべきか、いかにとなれば、わか恋はよむともつきじとは、つゞきがたし、此集に、ありそうみの、浜のまさこと、たのみしは、わする、ことの、数にぞありけるといふ、哥あれど、それはわする、ことの、かずといひ、万葉集に、八百日行(ヤホカユク)、浜(ハマ)のまさこも、我恋に、豈不益歟(アニマサラメヤ)、沖つ嶋守といふ哥も、おもふ事の、数〻多きを、いつれかまさるとよめれば、此哥の、我恋は、よむともつきじとは、詞のつゞき格別なればなり、君か代は、よむともつきじとは、つ、けからもよく聞ゆれば、これにしたがふべし、たとへ哥とは、おもふことを、物にたとへて、いひあらはすなれば、此浜のまさこに、たとへたる哥、よくかなへり、古註の興の□(欠字)によりて、ひける哥は、たとへといふ、和語の義に叶ひかたし

12

序註（36頁）

（「これはよろつの草木、鳥、けた物につけて心をみするなり、」以下の注）

此古注のこゝろは、興字の義にていへは、万の草木鳥獣につけて心をみすると云也、ものにつけてこゝろをおこしあらはすなれは、始の風のすかたと大かた同しくなるへけれは、しさまをかへて、我恋はよむともつきしの歌を出したるへしと也、すまのあまの歌すなはち風のすかた也、古注者もすかたわかてる歌をもとめえす、またく心にかなはされはこそ、此歌なとやかなふへからんとはかけるなるへし

序説

（「これはよろづの、草木鳥けだものにつけて、心をみする也――」以下の注）

興因(ハ)レ事感発といふ字義に、よれる註也、古註し(ママ)の意は、興の字の義によりて、草木鳥獣につけて、其心を見すべきを、この引哥は、かくれたる所なし、又かくれたる所あれば、はじめの風の哥と、同しさまに、なるをもて、すこしさまをかへんとて、此哥をひきたると、心得しもの成べし、すまのあまの、塩やく下署此哥は、風景に興して、其こゝろを、おもてにいはず、しかも意味をのぶ

る所、尤興の字にかなふべし

13

序註（37頁）

（「これはことのとゝのほりたゝしきを云也、」以下の注）

（前略）とむるとは認の字の意也、文字なとのうすきをあとゝ墨して、とむると云におなしと云説あるはかなへり、されは山桜の歌を出してとゝのほり正しき歌の本とせり

序説

（「これは、ことのとゝのほり、たゝしきをいふなり、」以下の注）

（前略、序註にほぼ同じ）とめうたと云ことは、此古註の外、古書に所見なし、此註したるもの、、新に作り出たる、詞と見ゆれば、可レ非（ママ）レ論するにたらす

14

序註（37頁）

（「むつにはいはひうた、」以下の注）

（前略、以下序説と別文）さき草は、和名抄云、葛文字集略云葛音娘和名佐木久佐日本紀私記云福草、（後略）

序説

むつにはいはひうた

（前略）さき草は、日本紀云、福草人名是福草と書て、さきくさとよみ来れり、又さいくさともいふ、さい相通ずれはなり、又令義解三枝祭、謂率川社祭也以三枝萃飾酒樽祭故曰三枝さいくさに、三枝の字を用る故は、新撰姓氏録三枝部連之条下ニ云、顕宗天皇、御世、喚集諸氏人等賜饗醼于レ時三茎之草生於宮庭採以奉献ル仍負姓ヲ三枝部造云ミ、この三枝、日本紀に有ル福草と同じ、或云、さいくさは、葛也といふ説有、是は和名に文字集畧云、葛、音娘、和名、佐木久佐、日本紀私記曰、福草枝ミ相値葉ミ相当也、と見えたれども、是は同名異草也、又檜をいふともいへり、枕草紙条下に、檜のことをいひて、みつばよつばの殿づくりも、をかしとかけり、中古以来、この檜の説を、取もちゐ来れども、さきくさとあれば、木を以釈する事、ひかこと也、たゞ福草を、さいくさと、よみ来れる故あれば、これを正義とすべし、猶延喜式に、明証の伝あること也、さて上のいふごとし、ク、是までの六

首の哥は、後人の傍註なりとす、しかれば、六にはいはひ哥なりと、ありつらめ、右の哥どもを、貫之の註せりとおもふ故に、後人なりの詞を、けづりしなるべし

15

序註（38頁）

（「これは世をほめて神につくるなり、」以下の注）

序説

（「これは、よをほめて、神につぐる也、」以下の注）

序註の「さらすは歌すかたを云に、ひなふり、あけうた、しつうた、かた歌なといひ、」以下なし。

以上、いささか詳細すぎるまでに列記したが、両者の異同の様子はうかがえると考える。例示した異同部分のみを見ると、全く別の注釈かと思えるが、それ以外の部分はほぼ同文で、ある箇所は別文、ある箇所は同文と、かなり極端である。この違いは、聴講者の編集過程や、真淵の加筆に依って生じたとは考え難い点が多い。それぞれが春満の別時の講義なのか、あるいは、複数回の講義を編集したための違いなのか、明らかでない。ただ、内容的に見れば、契沖の『古今余材抄』の影響は著しく、典拠の引用はほとんどその範囲を出ない。『古今余材抄』によりながら、自らの見解を示すという春満の姿勢は、真淵の『続万葉論』に影響を与えたことは明らかで、その点は重視されてよいと考える。

四

次に、序説と三宅氏紹介の春塘文庫旧蔵本『古今集序解』とを比較する。当然の事ながら、三宅氏の記述の範囲においてのみの比較である。

三宅氏の論文の範囲で序説と序解を比較すると、序説は序解にほとんど一致しており、両者が近い関係にあると認められる。しかしながら、全く同じものかというと、どうもそうではないらしい。

それ以前に、一つ注意すべき事がある。それは三宅氏が序解について「上巻の内題には表の外題と同じく「序解」としるしてあるが、下巻の内題には「序説」となつてゐる。」（『古典学』294ウ）とされていることである。あるいは、書名は「序解」「序説」と揺れ動いていたのかもしれない。さらに、序解の下

巻が実は序説で取合せである可能性を考えることも出来る。以下に述べるように、序解と序説が異なっていると確認される部分がいずれも上巻部分であることも注意される。

しかしながら、注（3）に述べたように、序解には末尾に真淵の享保二十一年（一七三六）の識語があるのに、序説にはそれがないことを考えると、やはり序解と序説は関係は有しながらも、成立を異にする別書と考えるべきであろう。

さて、三宅氏の序解の記述で序説に見えないのは次の箇所である。

1、序解では仮名序古注について貫之のものでないことを述べているとしており、その間の引用に序説の記述は一致するが、「すべて古注は、後人の筆としてとらず、」とあるとする（『古典学』295ウ）のは見えない。

2、三宅氏が春満の本文批評論として掲げる(4)「難波津の哥は、みかどの御ほむ始め也、」以下の注文の内に、「なには津の哥は、みかどの御始めなりといふより、手ならふ人のはじめにしけると云までも、貫之の辞にあらざるべし、いづれも文義前後につゞけ聞へず（ママ）」とあるとする（同296ウ）が、序説に見えない。

以上二箇所についてはいずれも序説に該当箇所を見出すことが出来ない。なお、1、2ともに上巻である。この事により、両者には文章規模で異同があり、序註と序説のような大きな異同がある可能性も考えられる。しかし、全体としては一致する場合が圧倒的に多く、序解と序説が相近い関係にあることもまた明らかである。

一方、序註は序解といかなる関係にあるかというと、前者が上巻部分しかないこともあって、比較はなかなか困難である。しかしながら、上巻部分に該当する1、2は序説と同じく存在しない。のみならず、序説には存在する次の箇所もまた存在しない。

3、本文批評論(1)「人の心を種として、」の注について、三宅氏は次のようにあるとする（同295ウ）が、二箇所いずれも序註にはない。

「人のこゝろをたねとしてといふこと理りなし、」と言ひ、「ひとつのこゝろ」と貫之は書けるなるべしとする。

「さるによりてこそ、よろづのことの葉とぞなれりけるとかきて、句義首尾するものなり、真字序にも、託其根於心地、発其華於詞林、とかけり、心地といふを以て、ひとの

こゝろにあらざることしるべし」

この点は重要で、先に序註と序説は冒頭の一段が全く異なる（序註と序説の異同箇所1）と述べたが、序解は基本的に序説の方に一致することを示すからである。

4、三宅氏が諸説引証とする内の(4)で、「難波津あさか山の歌について、「或抄に、父母と定れる義なきによりて、やうにてぞと書るといふは然るべし」とのべてゐる」（同300オ）とされるが、序註にはない。これは、先に序註と序説の異同を述べた7の箇所に当る。つまり、序解は序説に一致し、序註と異なる。

以上の点より、序註、序解、序説はそれぞれ文章あるいは段落規模で異同があり、序解と序説が比較的近く、序註はやや離れていることが判明した。

ただ、三者の関係については、今にわかに明らかに出来ない。冒頭部分で、序説が（そして恐らくは序解も）古今伝授にふれているのに対して、序註がふれないのは、重要と考えるが、春満の古今伝授に対する考え方が今一つ明確でなく、むしろ、故意に韜晦している可能性もあることなどを考えると、時期の先後と関係づけるのは困難であろう（なお、序釈には古今伝授に言及した箇所がある）。常識的に考えれば、序解に真淵の享保二十一年二月の識語があることを考慮に入れ、序註、序解、序説系統の注の成立を春満最晩年（春満は同年七月二日没）に設定することは、一応有力と思われる。ただし、『根岸國學院報告書』所収「荷田春満年譜稿」を見ると、古今集関係記事は享保中期までに多く、今後の調査に俟つところが多いように思われる。[5]

五

さて、春満の注が注釈史の上で重視されるのは、以後の注釈に影響を与えているからである。

ところが、先にも述べたように、春満の注は伝本が少なく、書名もまちまちで、実体が必ずしも明らかでなかった。今四種の注について、一応の内容が明らかになったので、次に、後人が春満の注と称しているものが、そのいずれであるかを考えたい。[6]

まず、賀茂真淵である。春満の注の中、2b序解、2c序説のいずれも真淵の関与を標榜しているので、春満の注と真淵の注には特別の関係が予想され、真淵が春満の注として、いかな

るものを用いているかは重要である。

すでにこの点については、三宅清、内村和至両氏に論がある。[7]

このうち、三宅氏は、真淵『続万葉論』の「なにはなるなからのはしもつくる也今は我身を何にたとへん」（巻十九、1051）歌の注に「荷田在満序の注云」としてかなり長い引用があることを指摘され、次のように述べられている。

この在満の序の注と言ふのは全集[8]の底本では在満としてゐるが、内閣文庫蔵本では「春満先生序伝云」とある。真淵は「続万葉論」の著に春満の序の注と言ふものを照覧してゐるのであるが、その春満の序伝と云ふ説を今の「序解」に照すに殆ど文章も一致するのである。今の「序解」では衍文が一箇所存し、又「続万葉論」の注には「云々」として略してゐる国史の原文をしるしてゐると言ふ微差はあるが、注の文章まで一致するから、「続万葉論」に所謂春満の序の注は即ち今の「序解」を指すものと考へられる。

（『古典学』302オ―ウ）[9]

この三宅氏の指摘によって、真淵が『続万葉論』で用いた春満の仮名序注は2b序解と一致することが明らかになった。さらに、この文は家蔵本序説にも存在しており、衍文がないことを除けば、三宅氏の記述に全く一致する。

一方、この箇所は1序釈には存在しないので、ここで真淵の用いた注は2の系統であったことになる（2a序註は後半が欠けており、該記述の存否は不明である）。

しかしながら、事実はそれほど簡単ではない。内村氏が指摘されるように、真淵が春満の注に言及するのは、右の箇所ばかりではない。他に『古今和歌集打聴』に一箇所、『古今集序表考』に一箇所、『古今集序別考』に三箇所の記述がある。内村氏も検討されているが、序註、序説には及んでいないので、もう一度検討する。

まず、打聴の箇所である。次のようにある。

（「むつにはいはひうた。」以下の注）

其うへ序文（フミコトバ）の中にかく哥を上しはくだ〳〵しく聞え且例なども有まじき事也仍て思ふに此哥共は後の人の己が意もて注しおきたるを又後より本文にうつし入たる物ならん貫之は真名序に一曰風（ニ）二曰賦（ニ）三曰比（ニ）云々の如くひとつにはそへうた二つにはかぞへ哥三つにはなど、書連（ツヅケ）られしものぞと荷田東万侶（カダノアヅママロ）の大人（ウシ）はいはれしこはしかるべき事とおぼゆ

（旧版全集巻七、50―51頁）

忠実な引用といえないので、比較が難しいが、類似の箇所を捜すと、左のごとくである。

序釈（新編全集48頁）

（「抑歌のさま六つ也、」以下の注）

凡序文を見るに、唐日本ともに其一部の大意をのへて文になす物なれは、かやうにくた〳〵しくうたを書て、といへるなるへしなとはあるましき事也、

序註（同34頁、序説もほぼ同じ）

（「その六くさのひとつにはそへうた、」以下の注）

大さゝき御門をそへ奉ると云よりいへる成へしと云までは、貫之の詞にあらすとす、是は古注已前の又古注なるへし、いかてか貫之の、かはかりにつたなきことをかゝれなんや、ひとつにはそへうた、ふたつにはかそへ歌とかきつゝけんこそ文章なるへけれ、なんそ証歌を出すに及む、其上といへるなるへしと、歌ことに書添たる後人の傍書うたかひなきこと也、

「くだ〳〵しく」の語の一致から、序釈が近いが、言い回しそのものは、序釈、序註いずれもあまり似ていない。引用というより、取意の文か。

次に、序表考である。

（「高砂住の江の松も相おいのやうにおぼへ」の注）[10]

此相おいを相生（アヒヲヒ）と思ひ誤りしかば引（ク）べき哥もおくに無まゝにさま〴〵作り言をいへり相生（アヒヲヒ）の心としては文（フン）もつゞかす何のことはりもなく相老とする時は上（カミ）とひとしく哥をもひかれ理も明らけくて文もいと面白き也是は荷田（カダ）東まろの考（へ）出せしことにて世にめでたくこそ（旧版全集巻七、10頁）

序釈（新編全集54頁）

（「高砂住の江の松も相おいのやうに覚え」の注）

此一章の、相生と心得より引へき歌なけれは、あらぬ論のみ有也、是は誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに、我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代遍ぬらん、此二首を引る文にて、我と松と相老のやうに覚ゆといふ也、されは誰をかもとよみたる人と、高砂の松我見てもとよみたる人は、住の江の松を相老の様に覚ゆると也、

序説（序註は欠）

（「高砂すみの江の松もあひおいのやうに覚え」の注）

是は相老の義なり、我みても久しくなりぬといへるは、我

ふりぬるほとも有にすみのえの松は幾代をかへぬらんといひ、たれをしもしる人にかせん、むかしの友も皆うせてわれのみふり残れり、高砂の松も年ふりたれとわか昔の友にてもなけれは、今は誰をかも知人にせんとの意なれは相老といへるに極れり

この相老説は春満の説として以後引かれるところであり、いずれにも見えている。

次は序別考である[11]。

（「凡六くさにわかれんことはかたくなん有べき」以下の注）

荷田うしは東万呂序文にくさ〳〵と哥を挙べくもあらず且其哥どもいかにぞやとおぼゆるもあれば哥は後の人の加へけんやといはれし是もさる事也前にも後にもいふごとく疑しき事誤れる事もいと多きは貫之ぬしかくまではあらじや

（旧版全集巻七、24頁）

ここは先に打聴で挙げた箇所が対象である。いずれが近いとも言えず、また、真淵がどの程度忠実に引用しているかを疑える箇所でもある。

（「いにしへよりかくつたはるうちにも」以下の注）

考ふるに今の本にかく伝はる中にもと云次にならの御時より広まりにける彼御世や哥の心をしろし召たりけんかの御時におほき三つの位といふまでの詞は後に書添たるもの也と荷田東万呂うしはいはれたり（旧版全集巻七、26頁）

序釈（新編全集58頁）

（「いにしへにかくつたはるうちにも」以下の注）

されは貫之、人丸の時代を平城とおもはれけるか、是貫之の大成考たかひといふへし、是を思ひ此文を考るに、ならのみかと、いふより、下のみつの位といふまて、衍文なり、後人何の為に加筆せしといはんに、是は古今伝をいろ〳〵おもしろくなさんとて、君臣合体になし、此所にかく書入たる也、

序説（序註は欠）

（「いにしへよりかくつたはるうちにも」以下の注）

……貫之は平城天皇をさしていはれける事明なり、されは真字序にも平城の天皇と有にても知へきなり、是は皇居にあらす、山陵に属て称する謚号なり、しかれはこゝにならのおほん時と書、人丸此時在世のよし見えたるは甚しき相違なるにつきて考るに、此所の文段第一にとりあはす、その上かのおほん時といひ、又かのおほん世やと同し詞をつゝ

け、おほきみつの位と物に見えもせぬ位を書かへたるは後人の所為うたかひなし、今案に是はいにしへよりかく伝るうちにも柿の本の人丸なん哥のひしりなりけりと連続の文義なる事明らかなり、

ここは述べていることはみな同じであるが、あえて言えば、序釈の方が近いように思える。

（「こゝにいにしへのことをも哥の心をも知れる人」以下の注）

○又古への事をも哥の心をもてふ言は既に有を又こゝに同じ言を重ねいふ事やは有べき是も必貫之の筆ならぬこと也、是らを後人の加へしてふことは又荷田大人（カダウシ）の考（カンガ）へによる也

（旧版全集巻七、28頁）

序釈（新編全集61頁）

（「いにしへの事をも歌をもしれる人よむ人多からす」の注）

是又加筆ならん、前にかの御時よりこのかた年は百年あまり代は十つきと書て、直に今此事をといひてうけかたき故に、此文章を書入たるものと見ゆ

序説（序註は欠）

（「かの御ときよりこのかた年は百とせあまり――哥をもしれる人おほからす」の注）

此一件もまた削除くへし、前後の文にうつらさるは後に加へたるなり、初のならの御時よりひろまりにけるといひしより是までの間に除くへしと、（ママ）文義は真字序に、昔平城天子詔侍臣令撰万葉集、自尓以来時歴十代数遇（ママ）百年、と有を以てかけると見へたり、されはかの除へき文をかき続くれは、ならの御時よりそひろまりにける、かの御世や哥の心をもしろしめしたりけん、是よりさきの哥をあつめて万えう集となつけられける、かの御時よりこのかたとしは百とせ余り世は十つきになんなりにける、如此なれは真序の意をかなに書、傍註せしを後の人あやまりて本文の落文なと、思ひ、切入れて書つらねしを、とかむる人もなくて世に伝りたれは、後は猶さこそあらめとのみおもひて心得、とくことも又かたけれは、伝授といふ事のおもきことにはかへりてなりぬる社なけかしけれ

このあたりも、春満の説として知られており、いずれも内容は同じである。

以上、真淵が春満の注として言及した箇所を比較したが、打聴の巻十九の引用が、明らかに2系統の注であったのに対して、

その他の箇所は、いずれか明らかでなく、むしろ1序釈に近い箇所もある。

このように真淵の言及が春満の注釈書の文に必ずしもそのまま符合しないことについて、内村氏は真淵が春満の説と言うときは、書承のみならず口承も含まれているので、一字一句の比較では解決されない旨の発言をされている。内村氏はまだ、序註、序説いずれの本文も知られない時点で、主として序釈を対象に比較されたのであるが、本稿の検討によっても事態はやはり解決しない。内村氏は真淵が春満の弟子であることから、口頭でその説を受けて知っていたとの立場をとられるのであるが、春満の注と称するものが幾種類も確認される現状では、なお検討の余地があると言えるであろう。

さらに、『続萬葉論』の歌注部分においても、時に春満説が引かれることがある。しかも、真淵の草稿の面影を伝えていると目される内閣文庫蔵本（二〇〇―一六九）[12]では、流布本より数多くの春満説が見られ、その多くは抹消されている（ほとんど「師曰」とし、「東万呂曰」など名で示す流布本とは異なる）。中には長文のものもあり、それが真淵の私的聞書であるにもせよ、成書の存在を示唆している。古今集全巻の注が存在したか否かは不明であるが、相当部分が引用可能な程度に整備されていたようである。

また、『続萬葉論』における春満説は後半部分が多く、新編全集に収められた歌注が全て冒頭もしくは途中までであるのと異なっていて、関連は認められない。

この問題については、なお、慎重な検討が必要であるが、稿者には今十分な用意がないので、将来を期したい。

六

次に、香川景樹『古今和歌集正義』を考える。正義における春満説への言及は以下の五箇所である。[13]

1、（「やまとうたは人のこゝろをたねとして」以下の注）

〔割注〕この顕注のひとつ心によりて近ころ荷田春満かひとつの心とせるは非也此ひとつ心はふた心の反対にて心を濁りてとなふる当時の常言なる事をしらす妄にの、言をくはへて下の万のことの葉にむかへたるは拙なきさかしらにてやかて語調もたしろくめり況や対句にいたりてかたへのもしをはふく類ひはすなはち紀氏の文法なる事をも弁せさるもの也（26頁）

2、（「そのむくさのひとつにはそへうた」以下の注）
此六くさの歌は荷田春満か古注より前に又誰そ一人の注也といへるはさるへきこと也（47頁）
3、（「むつにはいはひうた」の注）
（割注）春満は六つにはいはひ歌からの歌にもかくそ有へきと上なる一句を引おろしてこゝに入たるは非也さはかり意にまかせんもあまりなるに文意さへくたくるもの也（55頁）
4、（「よろこひ身にすきたのしみ心にあまり――すみのえの松もあひおひのやうにおほえ」の注）
古来の相おひ理りもたらひておたやかなるへし春満は是を相老の意として仮字をも改めたるは猶非也互に老たるをあひおいといへる事昔より例もなく又相おひのやうにおほえとは相おひにはあらぬ物をしかおほゆといふ也今は松も我も老たれはまことに相老なるやうにおほえといひて叶ふへけんや思ふへしこは己か老たる心より非情の松の老たるをも昔の友になそへられて同し齢のほとにやとふとは思ひなさるゝ感哀をいへり（60頁）
5、（「いにしへのことをもうたをもしれる人よむ人おほからす」の注）
此一句難波本になきそ正しきかくおなし事をいたつらに打かさねていふへきならねは衍文なる事うたかひなし互になんある今この事をいふに云〻と引つゝけてよむへし既に春満はかくのことくつらねたりされとも是よりさきの歌をあつめて万葉集と名つけられたりける又かの御時よりこのかた年はもゝとせあまり世はとつきになんなりにけるこれらの語をも衍文なりとして共にはふきたるはあたらすこは万葉の時代のたかひたるを紀氏によもさる事はあらしとおもひすくしたるのあやまり也（73頁）

さて、順に見てゆくこととする。

1について

序釈（新編全集41―42頁）

（「やまと歌は人の心を種として万のことのはとなれりける」の注）
人の心をたねとしてとは、聞よろつのものにつけていひ出せる故に心をたねとはいへり、顕照秘説に曰、一本、ひとつ心をとありといへる、是しかるへきと、次に鶯蛙をいひていきとしいけるものいつれか歌をと有、然れは鶯蛙も人

の心をたねとして歌をよむやといはむをいかゝこたへん、
また心をたねにてたりぬへし、されはよろつといはんひと
つ心といふにてよろしく侍らめ、おくにも長歌にも一つ心
そほこらしきといへり

序註と序説については、先に両者の異同を示した1に挙げたので更めて記さないが、文章は異なるが、いずれも「ひとつのこゝろを」をよしとして、正義の発言に一致し、「ひとつこゝろを」をよしとする序釈は異なる。

なお、『春葉集』所載仮名序には「ひとつの心を」とする。

2について

序釈

該当する文なし。

序註（新編全集34頁、序説ほぼ同文[14]）

（「その六くさのひとつにはそへうた」以下の注）

大さゝき御門をそへ奉ると云よりいへる成へしと云までは、貫之の詞にあらすとす、是は古注已前の又古注なるへし、いかてか貫之の、かはかりにつたなきことをかゝれなんや、ひとつにはそへうた、ふたつにはかそへ歌とかきつゝけんこそ文章なるへけれ、なんそ証歌を出すに及む、其上といへるなるへしと、歌ことに書添たる後人の傍書うたかひなきこと也、

ここは序註ならびに序説の「是は古注已前の又古注なるへし」を指すと考えられる。景樹が『春葉集』所載仮名序のみによっていないことを示すものである。

3について

この箇所は春満が六義の冒頭の文「そも〳〵うたのさまむつなり、からの歌にもかくぞあるべき」の箇所から「からの歌にもかくぞあるべき」の一文を「むつにはいはひうた」の次に移動したことを批判しているのである。ところが、春満の注釈でそのような説を唱えているものはない。実は、これは『春葉集』所載仮名序の本文を指しているのである。この本文が春満自筆の仮名序の奥書のみを流用し、本文は春満注に従って改竄し、春満自筆の臨書と称したもので、信郷の所為と見られることは新編全集解題に見えるところである（同書462―463頁[15]）。

しかしながら、景樹はこの説によったと判明するが、そもそも『春葉集』所載仮名序は偽作にしろ春満説によっているはずなのに、この箇所はいかなる根拠に基づいているのか、明らかでない。一字一句の相違ならば、書き誤りなどと言ってすまさ

れようが、この箇所は他にほとんど見ない特異の説ゆえ、不審である。未知の春満注を想定することも可能であるが、今は不明とするしかない。[16]

4について

これは春満に言及した序表考「高砂住の江の松も相おいのやうにおぼへ」の注の箇所に引用したのでそこを参照されたいが、「相老」と解するのは春満の創説として著名な箇所である。厳密に言えば創説とは言えないであろうが、この説を強く主張して、有力な一説としたのが春満であることは確かである。従って、序釈、序説とも同じ解釈である。なお、『春葉集』所載仮名序では「高砂すみの江の松もあひおいのやうにおほえ」とやはりその解釈を支持する仮名遣いである。

5について

これは一部前節真淵の項でも引用したので、更めて掲げないが、春満は「これよりさきのうたをあつめてなん萬葉集となつけられたりける」「かのおほんときよりこのかたとしはもゝとせあまり世はとつきになんなりにける」「いにしへのことをもうたをもしれる人よむ人おほからす」を後人の加筆として削除している。この点は序釈、序説ともに同じである（序解も同様かと思われるが確実でない）。また、『春葉集』所載仮名序も同様である。

さて、以上五箇所について見ると、3は明らかに『春葉集』所載仮名序を春満説として引いており、1、5についてもそれのみでも書きうるが、2と4は、注釈の存在なしには書くことができない。また、2は2系統の注と一致していると考えられる。

従って、景樹は『春葉集』所載仮名序のみならず、春満の注をも参照したと考えられる。また、確実ではないが、その注は2系統のものである可能性が高いようである。

七

春満注に言及するものは近代にもある。ここでは佐佐木信綱の例を挙げる。明治二十三年に刊行された『日本歌学全書』の古今集仮名序には春満への言及が三箇所ある。一見、佐佐木氏が春満の注を知っていたかのごとくであるが、以下に述べるように、佐佐木氏が春満の注を直接見ていたか否か疑わしい。

まず、六義部分に頭注して次のようにある。

其六種の一つには云々以下歌を六首本文に書入たるは後人

のしわざなれは荷田翁の考によりてはぶきたり

この六義例歌を後人のしわざとして削除することは、真淵の打聴、景樹の正義、ともに春満説として引くところであり、「荷田翁の考」といっても、孫引きの可能性が高く、佐佐木氏が春満の注を見た証とはならない。

次の箇所は、まず『日本歌学全書』の仮名序本文を掲げる。

いにしへよりかく伝はるうちにも、奈良の御時よりぞひろまりにける。かの御世や、歌の心をしろしめしたりけん。かの御時に、柿本の人麿なん歌のひじりなりける。これは君もひとも身を合せたりといふなるべし。秋の夕べ龍田川に流るゝ紅葉をば、みかどの御目に錦と見給ひ、春のあした吉野山の桜は、人丸が心には雲かとのみなん覚えける。又山部の赤人といふ人有けり。

これに頭注がある。

一つは

春満翁はかくつたはる中にも柿本人丸なんとつゞけられたり

もう一つは

おほきみつのくらゐは誤なる事しるければ削れり

東丸は柿本の人丸なん歌の聖なりける又山部の赤人云々とつゞけられたり

とある。

前者は「奈良の御時よりぞひろまりにける。かの御世や、歌の心をしろしめしたりけん。かの御時に、おほきみつのくらゐ」の部分を削除すべしとの説で、先に真淵の序別考で「いにしへよりかくつたはるうちにも」の注に春満説を引いていることを述べた箇所を参照されたい。そこでは序釈、序説いずれとも一致するが、序別考にも春満の説として言及されている。つまり、『日本歌学全書』の孫引きとも考えられ、さらには『春葉集』所載仮名序もそのようになっているので、春満の注を直接見る必要はない。

また、後者も同様と考えられる。この箇所に、真淵や景樹による春満説の引用はないが、『春葉集』所載仮名序はそのようになっており、特に注釈の存在を考えなくとも可能である。

従って、佐佐木氏が春満の注を見た証拠はない[17]。

なお、念のため言うと、これが春満の説であることは、序釈、序説を見れば明らかである。以下に引用しておく。

序釈（新編全集58―59頁）

かのおほん時におほきみつの位柿本の人まろなん、歌のひしりなりける、これは君も人も身をあはせたるといふなるへし

人丸正三位といふこと、何れの書にも見えす、或説におほきむつの位にて正六位なるへしといへとも、証とすへきもの物なし[18]、とかく衍文と見る時は、その子細に不及、或説に文武の御師範なといへと、是もおして文武に定て、君も臣も身を合せたるといふにて、やかて御師とは云、臆見也、すへてみなかやうなる証もなきことを、やかて詞を添ていひなす故、かゝるあやまりは出来る也

秋の夕立田川になかるゝ紅葉をは、みかとの御目には錦と見給ひ、春の朝のよし野々山のさくらは、人丸かめには雲かとのみなんおほえける

此文章後人の加筆也、則君臣合体をとり合せたり、それゆゑよみ人しらすの歌をみかとの御歌と名つけて、此所へとり合たり、さる程に人丸かよしの山の歌なし、是みな事を好む後人の愚昧より、はかなき事を書のせ、後世発明の人にそしりをうくる也、（後略）

序説

これは君もひともみをあはせたると云なるへし――雲かとのみなむおほえける

此一段も又後人の加筆とす、きみも人も身をあはするとは君臣合躰と云ことを和文にかきとらんとせる也、合躰と音にいはゝ理通すへし、身を合而と云ては合躰のことゝは心得かたし、和語に通せす音訓の差別をしらすしては弁へかたかるへし、又帝の御めに立田川の紅葉をにしきと見給ひ、吉野山の桜を人丸か心には雲かと覚へつるとて合躰と云へき理も立かたき事なり、なんそや貫之のかくうきたる事をしるさるへき、されは此一段を削る時は辞の筋とほりて意明らかに見えて尤佳文といふへきなり、故に是をも後人の加筆とす

今のところ、明治期以後の注釈で、春満の注を確実に見たと思われるものはないようである。

既に幕末において、諸注に意を用いている富樫広蔭『古今和歌集紀氏直伝解』にも見えず、その影響下にある堀秀成の注釈にも言及されない。明治初期の内藤萬春子『標注古今和歌集』（明17刊）の仮名序が堀の説によっていることは、先の拙稿に指摘した。

明治期において、実見していない諸注まで列挙する金子元臣

『古今和歌集評釈』（明34～41刊）にも春満の注の名は見えない。

付

宮内庁書陵部に所蔵される『古今秘伝集』（五一二―一一七）二九冊六通は春満が門人村井政方に伝授した一群の書で、そのうち二六冊が、伝授本体と考えられる。これについては、三宅清氏以来、春満の古今集に対する立場を考える上で注目されており、考察されている。春満と古今伝授の問題はいずれ専家の考察を俟つとして、稿者なりに春満相伝と称する伝授書群がいかなる性質を有するか、簡単に述べてみたい[19]。

まず、この『古今秘伝集』には内容をほぼ同じくするものが他にも存在する。宮内庁書陵部には『古今秘伝集』の中、二六冊に相当する部分を有し、登録書名を同じくする『古今秘伝集』（鷹三八〇）一二冊がある。

また、堺市立中央図書館には後者とほぼ同じものが存在する（計一三冊）[20]。

さらに、国文学研究資料館のマイクロフィルムにより、中田光子氏蔵の『古今和歌集東家極秘』一冊が右記のものの中、伝授書部分のみを収めたものであることも指摘できる。

以上のものはいずれも近世中後期に書写されたものである。これによって、春満の伝授書群は全く独自のものではなく、少なくとも近世においては一群のものとして、伝えられていたことが分かる。但し、それらの伝来経路は今のところいずれも明らかではない。また、最初に挙げた『古今秘伝集』（五一二―一一七）が荷田春満の手を経ていることは判明するが、その他の伝授書が春満の手を経た形跡はなく、可能性も低いように見受けられる。

ここで、『古今秘伝集』（五一二―一一七）の伝授本体の内訳を見ることにする。

それは、古今集注釈書と伝授書に分かれる。分量的に圧倒的なのは注釈書で、実に二十二冊に及ぶ。これが何であるかというと、東素純が宗祇の説に東家伝来の説を加えてまとめたと称する『素純聞書』に他ならない。

『素純聞書』については、片桐洋一氏が考察を加えられており[21]、それによれば、以下のようなものである。

東家では東家の祖東胤行（素暹法師）が為家の古今伝授を受けたと称していたが、その子孫東常縁が宗祇に『両度聞書』の

講義を行い、伝授したことから、にわかに注目を集めるようになった。宗祇は『両度聞書』を伝えたほか、それを敷衍した講義を度々行い、その説を広めたのである。肖柏への講義『古聞』、宗碩への講義『宗碩聞書』、堺の連歌師宗友（石井与四郎）への講義『宗祇略抄』、聴講者不明の『文亀二年宗祇注』がある。以上は宗祇の講義を忠実にとどめたものと考えられるが、『素純聞書』は同じく宗祇系の聞書と言っても、やや事情を異にする。それは、素純が常縁の息であるからである。『素純聞書』末尾の素純の奥書によれば、本書は宗祇の説（父常縁の説でもある）を受けるとともに、東家伝来の説を頼常（伝未詳、常縁の近親もしくは門弟とされる）からも受け、それを加えているとする。

このことが全て額面通りに受取れぬ事は片桐氏が証明された通りで、宗祇の説以外に東家伝来の説なるものがどれほど含まれているかどうかは疑問の余地があり、片桐氏は肖柏の『古聞』や、はては全く別系統である常光院流の注釈『延五記』をも取入れているとされる。

ただ、『素純聞書』は『書目』に九本と比較的多くが掲げられており、謹直に書写されているものが多く見受けられることから、東家の説を伝える注釈として、それなりに重んじられ、広く行われたことは疑えない。

一方、『古今秘伝集』に含まれる伝授書はどのようなものであろうか。書名を挙げると次のようになる。

『僻案重口決見聞』『古今和歌集見聞愚記抄』『古今集少〻安秘抄とも号ス』『三部書口伝』

これらの伝授書は、先に挙げたまとまった伝授書群以外にも、単独で、あるいは二、三まとまって伝わっている場合がある。『書目』で右の書目を検索すれば（第三番目の書は『安秘抄』として立項）、その事が判明する。

『僻案重口決見聞』と『安秘抄』についてはいまのところ他に確認されていないが[22]、『三部書口伝』と『古今和歌集見聞愚記抄』については、両書合したものとして石川県立図書館李花亭文庫本（八三一―五八）、国文学研究資料館初雁文庫本（一二―一八〇）、岐阜県大和町本（東家旧蔵[23]）があり、『古今和歌集見聞愚記抄』のみのものとして静嘉堂文庫本（五一八―一八―二二〇六〇）、『三部書口伝』のみのものとして天理図書館本（九一一、二―一三九一）がある。

しかしながら、内容を見ると、みな同一というわけではない。

『古今和歌集見聞愚記抄』を有する石川県立図書館李花亭文庫本以下三本は書名を「古今和歌集見聞懸記抄」と誤っており、その前に付されている『三部書口伝』は冒頭を欠き、書名がない。天理図書館本は『三部書口伝』の後半部を「秘伝」と外題して伝えている。

以上のような状態であるので、これらが今問題としている春満に関わる『古今秘伝集』の伝授書の一部と同一であることはなかなか気付かれにくかったのである。従って、他にも同じようなものが存在している可能性は大きい。

さて、これらの伝授書と先に述べた『素純聞書』とはいかなる関係にあるのであろうか。このような場合、往々にして単なる寄せ集めのこともあるので注意が必要である。しかしながら、この場合は無縁とは言い得ない。なぜなら、『三部書口伝』には途中（最初から三分の二くらいのところ）に次のような奥書があるからである。

此一帖歌道之極秘口決唯授一人重事也、頼常浅才愚昧間題筆舌事難計、蒙神冥罰者也[24]

十代道長翁平朝臣在判

この奥書については、井上宗雄氏が中田光子氏蔵『古今和歌集東家極秘』によって考察されており、詳細はそれによられたいが[25]、「十代道長翁平朝臣」は頼常と考えられるので、『素純聞書』奥書で素純が述べていることと関連が見られ、『素純聞書』とこの伝授書群とは関係があると考えられるのである。

但し、この奥書がどこからを指しているかは判然としない。『三部書口伝』冒頭からなのか、初めから三分の一くらいのところに「切紙上口伝」と小見出しする箇所があり、そこからなのか、よく分からない[26]。ただ、いずれにせよ、『三部書口伝』全体に素純が関わっていると考えられそうである。

以上をまとめると、春満の伝授書群は素純が伝えた『素純聞書』とそれに関連する伝授書から（少なくともそれを中心として）成っていると考えてよさそうである[27]。

〔注〕

（1）『古典学』は洋装本であるにもかかわらず、丁で頁を数えるようになっている。

（2）なお、これと同じものを片桐洋一氏も所蔵されているようである。片桐氏「古今集注釈書の展観」（『和歌史研究会会報』85昭60・8）に「三〇、荷田春満古今集序釈（写本）

所々に村田春海筆と伝える附紙を貼る。」とある。

（3）「木村なり由」とは、三宅氏紹介の南塘文庫旧蔵『古今集序解』末尾にある真淵の識語（「享保丙辰〈二十一〉春二月　加茂真淵稿」とする）に「是書ケることは、鳥が啼、東にある、木村なり由也、何ぞなり由が意ならむや、東万呂ぬしのむねなり、」とあることをさす。三宅氏は「「木村なり由」は「続萬葉論」の異本にみえる木村隼人の事かと考へられる。」とされる（『古典学』293ウ―294オ）。一方、家蔵本には著者「木成従」に「神田明神、主」と注記する。このあたりについては、『根岸科研報告書』『根岸國學院報告書』によってある程度明らかになった。前者の「荷田春満宛書状一覧」に七通の書状を認める「木村図書成（花押）」「木村隼人成（花押）」と署名する春満の弟子こそこの人物である。さらに後者所収「荷田春満年譜稿」にもたびたびその名が現れる木村成従（初名師親）がそれである。これらを踏まえて石岡康子氏「享保七年春満の江戸出府と門人たち」（「國學院雑誌」平18・11）には「木村図書（隼人）成従、神田明神下社神主、享保11年9月図書から隼人へ改める、本名師親、入門時期、元禄16、3、12」と要約されている。江戸における重要な弟子であったらしく、年譜稿によれば、春満の一周忌に菓餅を贈られ、その返礼として菓子油揚、糒等を贈っていることから、春満の晩年まで親しかったことが伺われる。また、「荷田春満宛書状一覧」によれば享保十一年、十二年書状に古今集に言及するところがある。

なお、名前の読みは「なり由」「成従」とあるので、「なりより」であろう。

（4）本書の引用は、上巻部分は濁点、句点があるのでそれに従い、下巻部分は句点のみ補った。

（5）一方、序釈の成立を序註、序解、序説系統の成立とどのように位置づけるかは難しい問題である。三宅氏は「古今集の序解―春満より真淵へ」（『古典学』293ウ）において、序釈、序解ともに春満最晩年の成立とされる。内山和至氏は既述序釈の解題・翻刻及び「荷田春満の仮名序研究をめぐって―国学における反・文献学の系譜(上)(中)(下)」（明治大学「文芸研究」89、91、94平15・1、15・9、16・9）において、序釈の成立時期を内部徴証から享保十年（一七二五）ころもしくはそれ以前とされる。根拠は、仮名序冒頭

の春満説が、「ひとのこころ」「ひとつこころ」「ひとつのこころ」と順次変化しており、「ひとつこころ」説は既に享保十年には現れていること、序釈は「ひとつこころ」であり、晩年成立の序解（序説も）の「ひとつのこころ」より前段階の本文であることによる。この説は享保十年と年代を出すことはともかく、有力と思われたのであるが、伏見稲荷大社蔵の春満自筆『古今和歌集仮名序』の出現でまた振出しに戻ってしまった感がある。新編全集の解題によれば、該書は春満自筆で、『春葉集』所載仮名序と同じ「正徳癸巳暮秋日　東丸漫書」の奥書を有し、本文は『春葉集』所載のものとは異なり、さほど改竄はない（但し、古注は省略）。ところが、冒頭が「ひとつの心を」となっていて、晩年になって現れたと考えられてきた「ひとつの心を」が既に現れている。この点をいかに考えるか、現段階では解決できない。鈴木氏は先に引用したように、解題で「『古今和歌集序釈』の方が（序註より、稿者注）やや先んずるように思われる。」（新編全集481頁）とされている。

（6）　実は、後述するように、諸家が春満説と称して引用するものには、春満の序の注釈書以外に『春葉集』所載の春満自筆と称する仮名序の模刻も含まれている。この序の模刻が春満の意図を含むとしても素性が疑わしい点については、三宅氏以来論じられているが、春満による校訂本文として広く信じられてきたのも事実である。

（7）　三宅氏「古今集の序解―春満より真淵へ」（『古典学』302オ―ウ）、内山氏の注（5）に言及した論文(下)「八　春満説と賀茂真淵」。

（8）　ここでの「全集」は無窮会蔵本を底本とする旧版全集であるが、東洋文庫蔵本を底本とする新版全集でも同様である。

（9）　この内閣文庫本とは後述の真淵の草稿を模写したと考えられる本のことである。なお、三宅氏が微差とされる文徳実録引用部分の省略は、『続萬葉論』が既に巻十七、890「世のなかにふりぬるものはつの国のなからのはしと我となりけり」の注文でこの部分を引用しているため、真淵が省略したと思われる。

（10）　『続万葉論』にもほぼ同文で見える。

（11）　これもいずれも『続万葉論』にほぼ同文で見える。

（12）　内閣文庫蔵『続萬葉論』が流布本と異なることは、三宅

清氏も気付いておられたが、その重要性について明らかにされたのは、原雅子氏「賀茂真淵の古今集注釈―内閣文庫本『続萬葉論』の位置」（「近世文藝」37昭57・11）である。原氏は内閣文庫本が真淵草稿本の忠実な写しであり、狛諸成の編集になる流布本以前の姿を持つことを明らかにされた。補足すると、内閣文庫本八冊は第五冊を除いて真淵の筆跡に酷似もしくは類似しており、虫損を写した箇所もあり、模写本と思われる。また、表紙、筆跡、蔵書印等を異にする第五冊も内容、形式は同じである。（内閣文庫本は現在ラベルの冊次が混乱しているが、ここでは正した冊次で述べる。）

（13）勉誠社の覆刻本（昭53刊）による。この本は明治二十九年積善館発行の訂正再版の影印である。

（14）先に序註と序説の校異として掲げた8の「以下ほぼ同文」とする箇所ですでに打聴が春満説に言及する箇所の検討の際に掲げたが、比較のため再掲する。そこに注記したように序説はほぼ同文である。

（15）『春葉集』付載仮名序が春満のものとして甚だ疑わしいこと、また「正徳癸巳暮春日　東丸漫書」と奥に記す春満自筆の仮名序の存在も知られ、両者の本文が全く異なっていることも三宅氏によって指摘されていた（『古典学』267オ―269ウ）。

（16）この点について、内山氏は注（5）論文の中において、これは信郷の所為とされ、六義の古注と例歌を省略したままだと話題の転換があまりに唐突になるので、このように改変したのであろうとされ、「これは『序釈』『序解』また真淵解にも確認できない説であって、こうした春満解があったとは考えられない。」（同49頁）とされる。

（17）但し、『日本歌学全書』緒言には「仮字序は紀朝臣の作られしにていとめでたき文なるを、後人の裏書所々に入て、今の本はいとみだりなれば、荷田翁の考をもととし、其後の人々の説によりて改め正したり。」とあって、あたかも春満の注釈を見たかのごとくであるが、これは『春葉集』所載仮名序を指すもので、注釈を見たものではないと考える。従って、本稿「はじめに」に示した拙稿において『日本歌学全書』の仮名序が「すさのをのみことより」を削除していることに関して、春満説の影響を述べ、佐佐木氏が春満の注を知っていたと記した（拙稿99頁）のは誤り

であり、謹んで訂正する。その削除が春満の説によることは正しいが、『日本歌学全書』頭注には春満の名は記されず、また、佐佐木氏はおそらく『春葉集』所載仮名序により、景樹の正文をも参考にして削除したのであろう。

(18) 無窮会蔵本には「証とすへき物なし」とあって、衍字なし。新編全集の誤り。

(19) 春満の古今伝授については最近発見された春満宛書状にも触れるところがあるとのことで、注(3)で言及した石岡氏論文に松平権之助信允や芝崎宮内少輔好安への伝授が指摘されている。また、『根岸科研報告書』所収「東丸神社文書目録」には古今集の伝授書が見え、その中には「古今集藤沢伝」など以下に述べる春満の伝授書集成とは別系統のものが見出される。これらについてはいずれ報告されると考えるので、本稿では考慮外とする。

なお、以下の『古今秘伝集』の記述については、稿者も編者の一員として加わった慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』(平19刊、以下『書目』と呼ぶ)357―358頁に記載があり、同書の記述を順次たどれば概略を知ることができる。本稿はそこでの記載を整理して述べたものである。

また、『書目』がもう一つの『古今秘伝集』(鷹三八〇)を「宮内庁書陵部蔵荷田東麿古今集伝受書」と呼んでいるのは、あたかもこれが春満と関係するがごとくで、正確でない。なぜなら、次に述べるように、この伝授書群は春満の伝授書『古今秘伝集』(五一二―一一七)と内容がほぼ一致するが、春満と関係する証はないからである。ただ、内実を言うと、内容が同じと言うことで、私どもがそう呼び慣わしていて、そのままになったのである。

(20) 堺市立中央図書館本は函架番号を異にし、別々に登録されている。(三一三―三八~四一)がそれである。なお、この本については佐々木孝浩氏の調査による。

(21) 片桐氏『中世古今集注釈書解題』第三巻(昭56刊)279頁以下参照。

(22) 『書目』の『僻案重口決見聞』の項に宮内庁書陵部本『古今秘伝集』(五一二―一一七)が含まれていないのは誤り。

(23) 大和町本については『大和町史 史料編』続編上(平11刊)による。表紙に「東家古今伝授書写之分/文化十一暦

文月二十六日より」とあり、解説に「文化十一年（一八一四）写　平胤忠によって再編された東家の古今伝授史料である。」とする。胤忠は遠藤（東）氏。寛政三年（一七九一）十月十二日卒、六十歳。なお、大和町は合併して現在郡上市となっている。

(24) この奥書読み解きがたいところがあり、返点を付すのは差し控える。

(25) 井上氏『中世歌壇史の研究　室町前期〔改訂新版〕』（昭59刊）のあとがき、及び同氏「室町期和歌資料の翻刻と解説―〔尭尋三十三回忌追善和歌〕・日吉社壇詠二十一首和歌・和歌秘伝書・古今和歌東家極秘―」（国文学研究資料館「調査研究報告」5昭59・3）参照。

(26) 天理図書館本『秘伝』はそこから始まっている。

(27) 『古今秘伝集』に添えられた村井政方宛春満書状の別紙には「文明の比より予か家に伝へ来る古今和哥集の伝書あり、これ東下野守平常縁の伝説にして頼常之伝抄也」などとあるが、後段はとにかく、前段が俄に信じ難いことは言うまでもない。なお、この書状は、早く佐佐木信綱氏『和歌史の研究』（大4初版、293頁）に紹介されているが、三宅清氏『荷田春満』（畝傍書房版129―131頁）や『神道大系論説編二十三　復古神道一荷田春満』（昭58刊）「東万呂文草」享保十一年の条にも翻刻され、よく知られている。

なお、この『古今秘伝集』については関連資料として、宮内庁書陵部蔵羽倉信一郎著『古今秘伝集考』（函架番号一五〇―一五〇、村井政方の伝及び村井に与えられた『古今秘伝集』が図書寮に蔵されるに至る来歴を記す）、京都大学附属図書館蔵『古今和歌集』（実は「素純聞書」、宮内庁図書寮より羽倉信一郎宛寄贈感謝状を付す、函架番号四―二三―コ八五、「素純聞書」は宮内庁書陵部本の副本か）がある。

（本章終わり）